

「すげーなおい…、アーネ」

「……？」

幼い頃より修道院で育ったアーネとエルザ。
性格は全く違うが、それなりに仲は良く、一緒に入浴したりもする。

「このおっぱい……デカくなりやがって……、羨ましいぜ」

「ひゃあっ！！な…何をするの！触らないでっ
…！あっ……！」

遠慮無くアーネの巨乳を両手で鷲掴みにし、
むにゅむにゅと揉みしだくエルザ。エッチ大好き
の不良シスターであるエルザの困った癖だった。
女が相手であっても、セクハラ大好きなのである。

「すげー……こんなにデカイのに
ちょー柔らかーぜ……！こんな
男が触ったら、即射精だぜ……！」

「え……、しゃ……？え……？」

無意識な性感に戸惑いつつ、エルザの理解不能な
言葉に混乱するアーネ。セックスは子を成すための
行為だとしか知らない純情なアーネだった。



「アタシにもそんなくらいありゃ、もっと男を
楽しませてやれんのによー」

自分の乳房をむにゅむにゅと揉みながら、
アーネとの差を確かめるエルザ。
はっきり言って、シスターのする事では無い。

「エルザ……！ どうしてそう男の人にだらしが
ないの……？ 仮にもシスターでしょ、あなた」

「知らねーよ。たまたま孤児だったから修道院で
育てられただけで、アタシは聖職者なんかにな
る気ねーもん」

アーネの前で、素っ裸で仁王立ちで威張るエルザ。
乳房も陰毛もまったく隠す気配は無い。呆れて
溜息をつくアーネ。これを男の前でもやっている
のかと思うと、将来が心配である。

「お前こそよ、そんだけエロい身体してんだ、
男でも作ればいーのに。シスターなんかより
よっぽど人のためになるぜ？」

性知識があまりないアーネは、よく分からない。
女が、その身体で男を癒してあげられるという
概念が、理解出来なかった。

「まーいいや。お前も好きな男が出来たら分かるぜ。
女の身体が何でこういうカタチをしてるのかってのがな」

そう言って、悩ましげな仕草で身体を洗い流すエルザ。
その様子は、女のアーネが見ても、溜息が出るほどに
美しい。これでは男も夢中になる筈だ、と恋愛に疎い
アーネでもそう思うのだった。



「……どうしました？何か御用でしょうか」

修道服に身を包んだ、若いシスター。
粗野な男達の一団に取り囲まれても、
疑う事を全く知らない純粋な瞳を向ける。

「ああ……用はあるぜ。お前にな」

男のいやらしい視線が、女の胸の
膨らみに注がれる。薄い布地の
修道服は、女の豊満な乳房の
厚みで、内側から大きく盛り上がり、
悩ましい曲線を描き出していた。
まるで「見てくれ」とでも言わんばかりに。

「あ、どちらへ……？私……
この後、用事があるのですが……」

女の意見など聞かずに、強引に
手を引いていく男。非力な
クレリックである彼女に、男の手に
抵抗するだけの腕力は無かった。
女は、そのまま人気の無い場所へと
連れられて行った



ぎし……ぎし……

ロープの軋む音が暗い石室の中に響く。
ここは、盗賊が拠点にしている砦跡。
そこに、宙吊りになった少女の姿があった。
修道服を身に纏った、髪の短い少女。
このあたりの修道院に住む、シスター・
アーネだった。

所用があって、街へと赴いた際に、街道で
運悪く盗賊の一味に遭遇。その美貌が
災いしたか、その場で拉致され、砦まで
連れ去られて集団レイプされたのだった。

心優しい敬虔なシスターであるアーネは、
自分の身に何が起きているかも理解出来ない
まま、やがて静かに発狂した。

「ああ……すっげー……エロい……！
修道女ってみんなこんなにエロい身体
してんのかよ……！」

「こいつだけだろ」

パン！パン！と大きな音を打ち鳴らし、
宙吊りとなったアーネの身体を犯す男。
豊富な乳房を揉みしだき、勃起したペニスを
遠慮なくアーネの膣内にぶち込む。
反応は無い。既にアーネは死んでいた。

「こんないい女が処女だったとはな……
まったく勿体無い事してるもんだぜ」

今年で〇7歳になるアーネ。性的な事に
禁欲的な生活を強いられているとはいえ、
その身体はもう立派に大人の女である。
男を欲情させ、勃起させるには十分な魅力を
持っていた。街を訪れる度に、結婚の
申し込みを受ける程である。しかし当の本人は、
神に身も心も捧げているため、男にはまったく
興味を示さなかった。



「可愛い……！こんな可愛い女、修道女なんかより
娼婦の方がよっぽどお似合いだぜ……！」

男は、腰を振りながらアーネの揺れ動く大きな乳房を
眺める。これほどに大きく、形の良い乳房は娼婦でも
滅多に見掛けない。

「ああいく、いく…！やっぱ修道女をレイプすんのは
最高に興奮するぜ……！ああ……！！」

男は、強姦が趣味だった。娼婦などは、金を払えば
いくらでもセックスが出来る。それでは興奮しないのだ。
汚れを知らない村娘や、聖職者を犯すのが非道な
男の趣味なのだ。

「出るっ！ああ！！」

びゅるっ！！びゅるっ……！
アーネの膣内に、発射される精液。
既に50人以上の男にレイプされた
後である。膣内は精液で溢れ、
膣の感触もほとんど残されていない。
それでも、アーネの美貌はそれだけで
男を射精に導くほどの美しさだった。

「ああ……サイコ……聖職者の
オッパイ……！」

男は、射精を繰り返しながら、アーネの
乳房を揉みしだく。弾力溢れる美乳。
凄まじい美しさと感触は、男の目に
触れるために存在しているかのような
神々しさを放っていた。

「何発だっけ出せるぜ、こんな
いい女ならよ……！」

順番を待つ男が、アーネの身体に
群がり始めた。もう何回目かも
分からないセックスが始まった。

「可愛いぜ、エロシスター……」

男は、アーネの乳房をむにゅむにゅと揉みながら、唇を重ねる。突き出された舌を絡め取り、冷たい口の中を嘗め回す。

「何で殺したんだよ、こんないい女……！」

男は、腰を突き入れながら、揺れ動く乳房を眺めつつ、興奮を高めていく。

「しょーがねーだろ、殺るのが一番興奮するんだから」

「一回しか楽しめねーのが難点だけだな」

男達は、非道な盗賊。人を殺す事など何とも思っていない。それどころか、レイプよりも殺人の方が興奮する性質だった。

「健気で可愛かったぜ、死ぬその瞬間まで『迷える子羊達をお救い下さい』とか言っててよ。今まさにその子羊達にチンポハマられたまま殺されようとしてるって時に。こいつも大概異常者だぜ……！！」

男は、既に事切れた修道女の死体を犯しながら、露出した乳房を眺めつつ、興奮し射精しようとしていた。

「いく……！ ああ！ 可愛い！ 死んだ美人修道女の可愛い顔とオツパイ同時に見ながらチンポいく！ ああ！ ああ！ あ——っ！！」

びゅるんっ！ びゅっ！ びゅくっ！！ びゅくっ！！

男は、無念にも果たした誠実な修道女の膣内に、容赦なく射精した。まさに鬼畜の所業だった。

「ああ可愛い……何度だってポッキする……！」

「ホントエロい身体してるよな……、何でこんなに可愛い女が実在するんだ……！」

男達は、既に死体となったアーネの身体を何度も何度も輪姦し、その欲望を吐き掛けていく。汚れ無い修道女の身体が、醜い男の欲望を受けて白く汚れていく。つい数時間前まで処女だった女は、既に50人以上の男に、延べ300回以上も犯され続けていた。子を成す方法としてしか、セックスを知らなかったアーネ。キスも、セックスもそこで初めて経験する事となった。舌を触れ合わせるキスも、フェラチオも。乳房を使った愛撫も。あらゆる方向から、様々な体位でするセックスも、全て教え込まれていった。

「最後はアンアン声出してたよな。流石はエロい身体してるだけあって、本性は淫乱だぜ」

「こんだだけ可愛いんだから、淫乱に決まってるだろ」

男達は、数多くのレイプ経験から、容姿の美しい女ほど淫乱である事をよく知っていた。

「ああ……チンポいく……！ この顔見てるだけでイける……！」

「オツパイ最高……！ 修道女の巨乳最高にヌケる……！ ああ出る！」

びゅるんっ！ びゅっ！ どぷっ！ びゅるんっ！

男の精液は、宙吊りになり、乳房を露出したアーネの死体、さらに白く精液で汚していった。



修道服の少女を取り囲む、柄の悪そうな男達。
この辺りを根城にする山賊だった。

「大人しくしな……死にたくなかったらな」

小柄な少女が一人で街頭を歩いているのを見て、
金品を強奪、その上で強姦しようと目論んでのものだった。



「何だてめーら、あたしが誰だか分かって言っただのか？」

屈強な男達に取り囲まれているというのに、
物怖じもせずに男達の顔を見渡す。
不敵な笑みを浮かべ、どこからともなく
錫杖を取り出す少女。戦闘用に特化した
魔導杖だった。

少女の名はエルザ。

行方不明となっている友人のアーネを
搜索していた僧侶だった。

「ちょーどいい。テメーらブっ殺して
アーネの居場所を吐かせてやる」

器用に錫杖を振り回し、男達を威嚇する。

敬虔なシスターであるアーネと違い、

エルザは荒事にもすぐ首を突っ込む

気性の激しい性格だった。

幼馴染のアーネはまだクレリックだが、

エルザは既に戦闘職のプリーストである。

争い事は大好きだった。

「こいつプリースト風情で何でこんなに
自信満々なんだ。殺んぞ？」

「やれるもんならやってみろよ、
腐れチンポ共」

喧嘩では、男相手でも負け知らずの
おてんば娘エルザだった。既に任務で
冒険者や傭兵に交じって大暴れしている。
酒好き、男好き、聖職者とはとても
思えない困った不良娘である。

「もしあたしのアーネに手出ししたら、てめーら
楽に死なせねーからな……覚悟しとけ」

粗暴で気性の荒い性格のエルザだが、仲間思いの
情に厚い少女だった。修道院で育っただけあって、
道德観念は根付いているのである。

エルザは、武器を構える複数の男達へと、躊躇無く
歩みを進めていった。



「むっ……！むぐう……！むうっ……！……っ！」

荒野に響く、女の呻き声。半裸の修道女が、後ろから犯されつつ、男のモノを咥えさせられていた。

「口ほどにもねー……そんなモンか？プリーストってのは。まあ女にしちゃやる方だろーとは思うけどよ」

修道院では、エルザの魔術の才能と実力は折り紙付きである。しかしそれは、相手が勝てる相手だった場合の話。この世の中には、上には上が居るのである。何せ盗賊団が存在しているのは、警備隊や傭兵などでも太刀打ち出来ないほどの猛者だからだった。非道さと強さは両立するのである。

「あの弱っちいシスターと違ってコイツは犯り甲斐があるなー、こーゆー強気な女をレイプするのは最高に興奮するぜ……！！」

「なっ……！てめ……んっ、んうう！！」

「ほら、ちゃんとしゃぶれよ……！修道女のくせに処女じゃない淫乱シスターが」

「んっ！んっ！んっ！んっ！んああ！！
あっ！あっ！あっ！あっ！あんっ！！」

パン！パン！と尻を打ち鳴らし、エルザの身体を犯しまくる男。たくし上げられた修道服のスカートから覗く白い尻が波打つ様子が、何ともセクシーだった。

「ちく…しょう…！テメエらみて一な腐れマラ共ニ……！このアタシが……ああ！！あっ！あっ！あっ！あっ！！」

容赦無くエルザの膣内を犯す男。激しいセックスに、思わず喘ぎ声を上げてしまう。エルザは、修道女ではあったが、セックス大好き女だった。厳しい規律により禁欲的な生活を強いられてきた反動で、いやらしい事に興味津々のおませな娘に育っていた。幼い頃から隠れてオナニーしまくりで、初体験の〇3歳から数えて、経験人数は軽く200人を超える。〇7歳になった現在でも、修道院を抜け出し、男を釣っては毎晩のようにセックスしまくりだった。

「すっげ……超濡れまくり……！こんな修道女がいていいのかよ……！」

「オッパイ見られて興奮してやがるしな…とんだ淫乱シスターだぜ……！なあ、セックス大好きなんだろ？ホントは俺らにレイプされて超興奮してんだろ？ああ！？」

「ち、違……ああ！あんっ！あんっ！あんっ！
あんっ！あんっ！あんっ！」

悩ましげに尻を後ろに突き出し、セックスの快楽に甘い喘ぎ声を上げるエルザ。形の良い乳房が、男達の見ている前でぶるぶると形を変えて揺れ動き、誘惑する。

「すっげーエロい……修道女ってこんなにエロい女ばっかなのか？昨日の巨乳シスターといい…何だっけ、アーネだっけ？」

「てめ……らっ、アーネに……何を……！
ああんっ！あんっ！あんっ！すごっ！あっ！」

「安心しな、お前もすぐに同じ目に遭わせてやるよ……くく、ほらほら！チンポイだろ？ほら！ほら！ほら！このエロシスター！！」

エルザの甲高い声が、周囲に鳴り響いた。



「ああんっ！チンポッ！チンポッ！ああんチンポ凄いいよ！
チンポ！ポッキチンポ凄いい！あああんっ！！」

繰り返されるレイプ。元々淫乱な性格のエルザは、
男達の乱暴なセックスに、次第に淫乱な本性を
表すようになっていた。〇7歳にして、あらゆる
セックスを経験済みのエルザ。もう普通の行為では
満足出来なくなって来ていた所だったのだ。

「こいつレイプされてんのに感じてやがる……！
どんだけ淫乱なんだよこのエロシスター……！」

パン！パン！パン！パン！
普通の女ならば刺激でショック死でもしかねない
ほどの、激しいセックス。経験豊富なエルザは、
そんな責め苦にも甘い喘ぎ声を出して応えた。

「俺ら、お前の仲間をレイプして、殺して、その死体を
さらにレイプした挙句、精子ぶっ掛けまくった後、その
身体バラバラにして街に飾って来たんだぜ？そんな
相手とセックスして、気持ちいいのかよ？」

「ああん……！アタシの友達を……！アーネを
殺した男とチンポセックスしてるう！アタシ感じてるう！
殺人鬼のチンポ舐めてしゃぶってマンコセックスして
超感じてイってるう！！何回もお！！ああん！！」

エルザは、正気だった。男とのセックスの快樂で、
興奮しているだけである。エルザは、正真正銘の淫乱で、
セックス大好きの変態少女だった。友達を殺した男が
相手だと思えば、猛烈にセックスに興奮していた。

「可愛い女だな……聖職者のくせにセックス大好きな
淫乱女なんて……！エロい事大好きな女は可愛いぜ」

パンッ！パンッ！パンッ！
エルザの小さな尻を、屈強な男の腰が激しく打つ。

「あんっ！あんっ！あんっ！あんっ！あんっ！」

甘い喘ぎ声を出しながら、自らも腰を振りまくり、セックスの快樂に
酔い痴れるエルザ。レイプだというのに、好きな男との甘く激しい
セックスよりもずっとずっと興奮していた。

「なんて声出してんだよ、シスターのくせに……！恋人でもない
男とのセックスで何でそんなに感じてんだ？ああ！」

男の腰の振りが、更に速くなる。もう壊れてもおかしくない勢いだ。

「あん！あん！だって！気持ちいい！気持ちいいよお！
あん！セックス！セックス最高！レイプ最高！殺人鬼の
男にレイプされてアタシ感じてるう！ああん！好き！
好き！レイプ最高に好き！こんなに感じるの初めてえ！」

元々淫乱だったエルザは、繰り返される激しいレイプと、
親友の死、自分の身の危機、それらの恐怖とストレス
から逃避するために、完全にイってしまっていた。

「チンポ！チンポハマてっ！もっと！もっと！ああん
シスターのアタシのオツパイ見ながらポッキして
マンコにハマてえチンポッ！シスターマンコに人殺しの
殺人チンポズコズコハマて子作りセックスしてえ！！
中でビュって出してアタシを孕ませてえ！人殺しの
親友殺しの男のザーメンたっぷり出して聖職者の
アタシを妊娠させてえ！あああ——ッ！！」

「可愛い……！このエロプリーストが……！そんな
エロいオツパイ男に見せつけて感じて……！聖職者の
くせに……！チンポ出ちまうだろ……！ああ……！
出る！出る！チンポ出る！ザーメン！ああ！！」

ぱんっ！！ぱんっ！！ぱんっ！！ぱんっ！！
びゅるっ！！びゅるっ！！びゅるっ……！！

男は、いった目で恍惚の表情を浮かべるエルザの
膣内に、思いっきり中出し射精をした。



「あんっ！あんっ！チンポッ！チンポおっ！」

既に、一切の抵抗を示さず、男達のレイプに喘ぎながら腰を振りまくるエルザ。明らかにレイプを楽しんでいた。大きく足を開き、露出した乳房を男達に見せ付け、興奮させる事に喜びを感じている。修道女でありながら、エルザは淫乱の変態少女だった。

「面白くねー、もう死ぬ」

男は、手に持ったロープでエルザの首を締め上げる。

「……っ！？え……？あ……が……っ！！」

エルザは、快楽の天国から現実に引き戻される。今自分は、非道な男達に強姦され、命の危機に瀕しているのだという事実に。

「な……やめ……そんな……助けて……くれるって……何でも……する、から……あがつ……！……あえ……っ！！」

「んな訳ねーだろ……！てめーみてーなクソ女、生かして帰すと思うか？エロくて可愛いだけの腐れマンコが……！！」

男は、ロープを首で結ぶと、カーブ引張る。エルザの首を締め上げたまま、固定されるロープ。もう緩む事は無い。エルザの気道を締め上げ、塞いだまま、固く結ばれて解けない。

「……っ！——……っ！！……ぐ……！！ぐるじ……！！……！！……！！……ッ！！」

甘い快楽の世界から一転、苦悶に悶えるエルザ。その間も、男による激しいレイプは継続していた。抜き差しされる極太のペニス。打ち鳴らされる尻。揺れ動く乳房。絞首による苦痛と、セックスの快楽が緋い交ぜになり、エルザはすさまじい表情を浮かべていた。死に向かう者の、恍惚の表情。それが、男が最も興奮する女の表情だった。

「ああ……！サイコー……！その表情イイ……っ！超ボッキするぜ……！ああ……！ああ……！イク！イク！」

男は猛然と腰を突き込みながら、苦しうに悶えるエルザの姿を見下ろす。白目を剥き、涎を垂らし、死へ向かう恐怖と、凄まじい快楽に支配され、今まで見た事もないような姿で、男を興奮させる。

「……………、……………、……………っ」

エルザは、もう動かなくなっていた。息が止まっているのだ。脳に酸素が回らず、思考も動作も出来ない。性的な快感で反射的に身を震わせるのみである。打ち付けられる腰の衝撃で、がくがくと全身を揺らし、女の乳房が悩ましく形を変えて揺れ動く。死に向かいながらも、尚も男を誘惑するように。

「ああ可愛い！あんな偉そうに俺らに立ち塞がったブリストが！レイプされて殺されてオツパイ見せて中出しされようとしてやがる！ああ！ああ！いく！ああ！ああ！あああ——っ！！！！」

びゅるっ！！！！びゅる！！びゅっ！！
びゅるんっ！びゅるっ！びゅるっ！びゅっ！！

エルザの膣内に、思い切り射精する男。凄まじい精液の放出量だった。何度も射精した後だが、興奮している時は射精量が違う。男にとって、女を犯しながら殺すのは、最高の快楽だった。

びくっ……………、びくっ……………！

絶頂の快楽と、断末魔の痙攣が同時にエルザの身体を震わせる。既に瞬きは止まり、呼吸も止まっていた。全身を痙攣させる度に、形の良い乳房がぶるん！ぶるん！と揺れる。

「ああもう……サイコー……！あの巨乳シスターと……いい……ここ数日は最高の収穫だけ……！ああ……すっげー出る……！まだまだ出る……！」

男は、エルザの乳房を揉みながら、唇にキスをする。突き出された舌を絡め取り、愛しそうに嘗め回す。エルザは、もう一切の反応を示さなかった。

「ああ……いいぜやっぱり……バラされた女の身体ってのは……！！」

エルザの身体に群がり、各々がその身体を犯していく。もうエルザは絶命していた。何をされても反応せず、その光を失った瞳は、空しく虚空を映すだけだった。

「腕寄せ、手コキしてやる……、ああ……柔らかい指……もうこれだけでザーメン出ちまう……っ！小うちやい手だな……、俺のチンポ握り込めねーじゃねーか！」

「ん……！ああ……！っ……！イイ……！イイ……っ！やっぱりこのフェラ最高だぜ……！首からチンポ出ちまう……！ああ……！ぬるぬるしてサイコー……！！」

それぞれが離れた場所で、エルザの若い肉体を凌辱していく男達。エルザの身体は、切られ、折られ、切断され、5つに分断されていた。頭部、胸部、右腕、左腕、下半身。バラバラになったエルザの身体が、非道な男達の慰み者とされていた。

「ああ……可愛い……！昨日の巨乳娘に比べると大きさでは負けるけど……形のいい美乳だぜ……！」

二人の男が、エルザの両乳房を犯す。二本のペニスが、固くそそり立った乳首を捉え、肉厚溢れる乳房にめり込んでいく。ぷにゅ！ぷにゅ！と弾力ある若い乳房の感触が、男のペニスを刺激していく。

「オッパイ最高だぜ……！形のいいオッパイってのは、それだけでチンポボッキさせられるぜ……！垂れた形の悪いババアのじゃ絶対ボッキ出来ねー」

「若くても垂れたオッパイのクソ女も居るけどな、誰とは言わねーけど」

「ほら！ほら！いい尻だぜ……！〇7歳だっけ？小さくて肉厚あって、サイコーにいい時期だぜ……！おいちょっと顔見せるこっちにも」

男は、エルザの下半身を犯しながら、別の男の股間に吸い付いた。首だけとなったエルザの顔を見る。エルザのバラバラ死体を見ながら、各々が興奮し、射精しようとしていた。まさに異常者の集団だった。

「ああいく！いく！〇7歳の女の子の手でイク！ああ！」

「オッパイ……！シスターの女の子のぶるぶるオッパイ！超イイっ！ああ！」

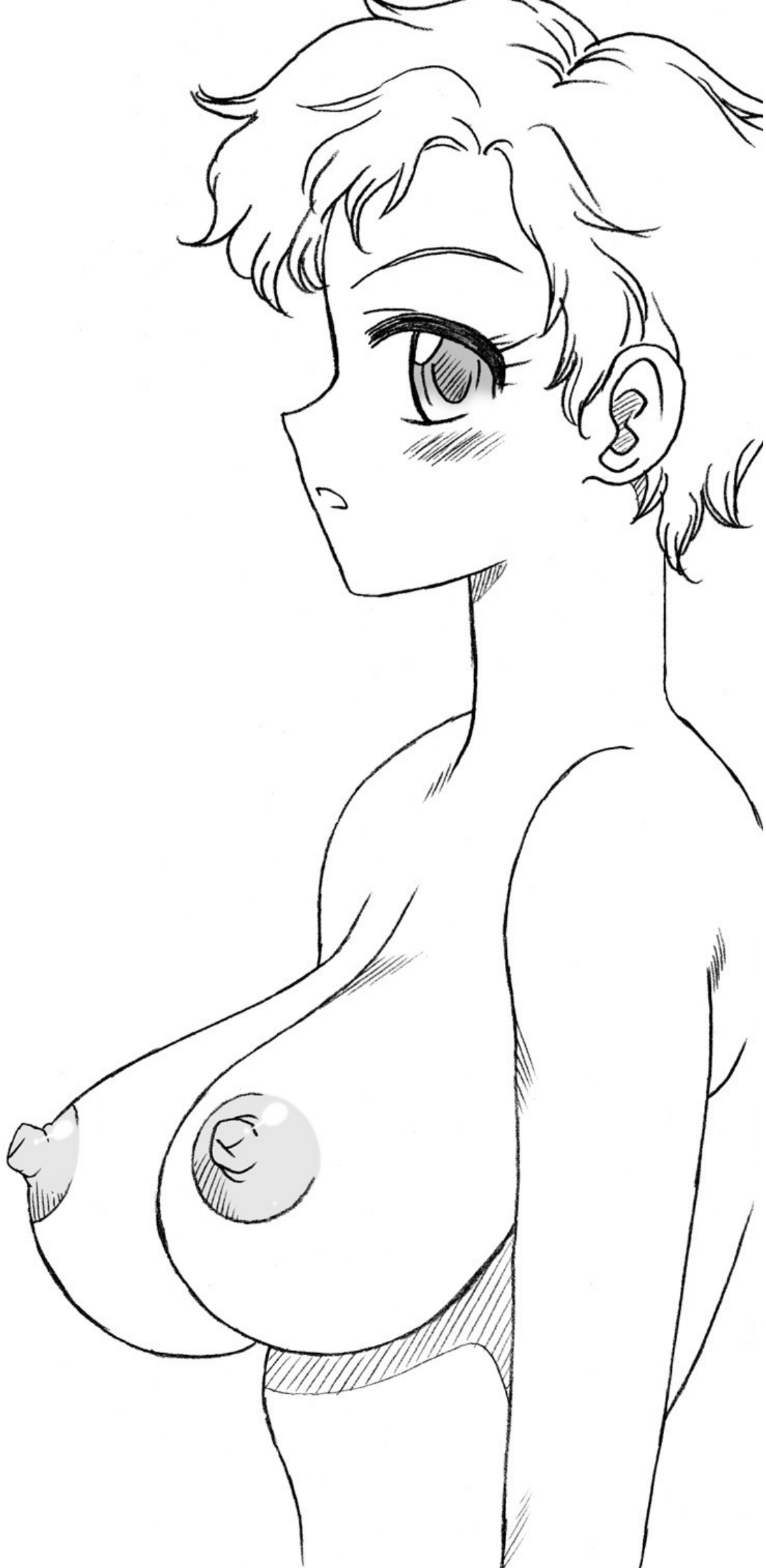
「ほら！ほら！フェラしてるぜ！お前の喉マンコにボッキしたチンポズボズボしてるぜ……！いくぜほら！ああ！」

バラバラとなったエルザの身体は、もう人の形をしていなかった。それでもエルザの美貌は、男達を誘惑し、射精され続けるのだった。

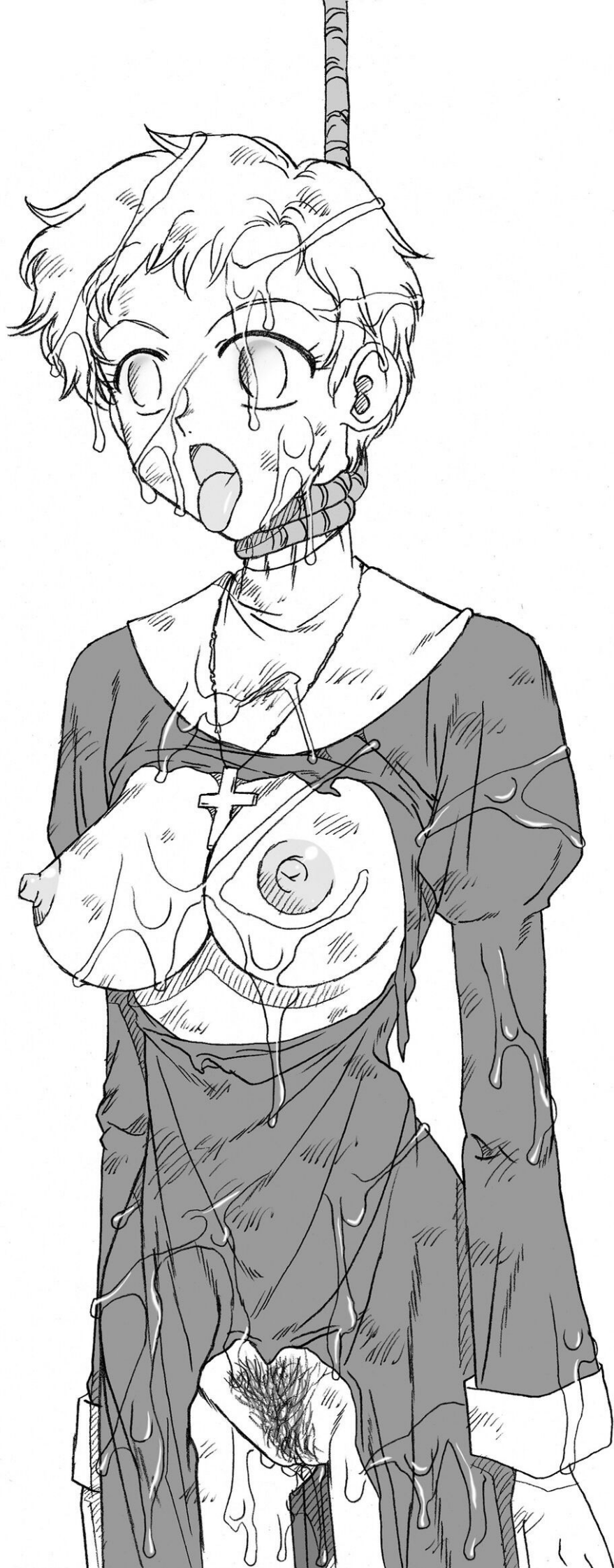
エルザの死体は、見せしめとばかりに修道院の中庭に飾られ、放置された。同じ修道院の仲間達は、エルザの変わり果てた姿を全員が目撃することとなった。

















Reminder that translations are not only welcome,
they are in demand!

提醒一下，不仅欢迎翻译，
他们很抢手！

翻訳を歓迎するだけでなく、
彼らは需要があります！

번역도 환영합니다
그들은 수요가 있습니다!